

「先の偵察任務からよう帰った。ご苦労だったな。団長殿」

「ありがとうございます。シユウメイギク様」

厳かな雰囲気がステラの周りを包み込んでいた。

ベルガモットバレー王城、その謁見の間にベルガモットバレー女王の柔らかな称賛が響き渡る。それに対して紅い陣羽織をまとう団長が、うやうやしくひざまず跪きながら礼を返していた。

ステラが所属している国家直属の部隊、シユウメイ騎士団はたった今任務を終えて、故郷のベルガモットバレーに帰国したばかりだ。そして今はちょうど、同僚であり親友のスターチス、そして敬愛すべき団長とともに、女王シユウメイギクへ任務の達成報告を行なっていたところである。広い間取りのこの空間にいるのは自分たち四人だけであり、他に従者の姿や衛兵の姿は見当たらない。

「コリウスより前もって報告を耳にしていたが……今回もよき働きぶりだったが、団長殿。敵地コダイバナの偵察、そして害虫たちの調査。見込みより二日も前倒しで戻ってくるなどとは、今回もまた見事な働きぶりよの」

「団長さんが優秀なのはあつたりまえですよ、シユウメイギク様つ。なんてつたつて私たちは、団長さんの愛のムチにビシバシ鍛えられまくりましたからねつ」

「ふふつ、よく慕われているようで何よりぞ」

侍女の名を出しつつ問いかけてくるシユウメイギクに、隣にいたスターチスがウインクしつ

つそう述べた。

昨日まで勤しんでいた今回の任務は、端的に言うなら偵察任務であり、団長曰く完遂にはおおよそ十日かかる見込みだった。ただ偵察と言ってもただ単に敵の様子を見るだけではない。今回の任務は敵の戦闘力を図るための威力偵察を重視した内容だった。

偵察先であったスプリングガーデンの南西に位置する荒れ地の半島、通称『コダイバナの国』は、千年前初めて害虫が生まれ、害虫に滅ぼされてしまった大地である。今では世界中に出没するようになった害虫たちの総本山と恐れられているが、同時にいち早く攻略して奪還すべき最重要拠点でもあった。

なぜならば、スプリングガーデン諸国たちが力を合わせた近年の調査で発覚した情報によると、その国の中心地点には、こちら人間側の反撃の狼煙のろしになり得る世界花『コダイバナ』の芽があるからだ。

敵の弱点、生息地の情報などを味方に持ち帰ることは、自軍の勝利につながる最重要要素である。そして世界花『コダイバナ』の芽は他の世界花たちと同様に成長させれば、世界中の虫たちを害虫へと変えてしまった『死にゆく世界の支配者』による悪しき毒を、総すべて浄化する事ができるはずの代物だ。

その奪還作戦において必須とされる周辺に生息する敵の弱点、生息地の情報などを味方に持ち帰るため、自分たちは偵察任務の依頼を引き受けていたのである。

3 Lovely Twinkle

その依頼を送ってきたのは、スプリングガーデン諸国の事実上の中心戦力である騎士団、セントフロレスの団長だ。セントフロレスの団長とステラたちの団長が個人的に親しい間柄であり、高い信頼を置かれたことから今回の依頼が舞い込んできたのだ。

そのような経緯から今回の任務は我が騎士団において最重要任務として据えられ、失敗は許されなかった。

そしてステラはこの任務に参加できたことがうれしかった。愛する団長に、女としても戦士としても選ばれた。その喜びは何事にも代えがたいから。

「俺は別にやるべきことをやっただけ。……普段から真面目に訓練しているステラたちみんなが、単に優秀だっただけです」

女王の問いに対しステラたちの方をわずかに振り向いた後、さも当然のように団長は口にする。その後でシユウメイギクが首をやんわりと横に振った。

「謙遜するでない団長殿。遠見の魔法ですでにそなたたちの戦いぶりを見守らせてもらった。味方への被害を最小限にとどめ、各人の強みを最大限に引き出す戦いぶり……それができるのは、ひとえにそなたを認めた皆が、そなたのためを思って尽力してくれることに他ならぬ。まさにそなたはこの国の誇れる兵よ。そう思うであろう、ステラ」

自分たちへの信頼そのものを口にし、シユウメイギクははにかむ。そして急に話題を振られたステラは慌てて口を開いた。

「そ、そうですね、団長さん！ 私たちはいつも、団長さんに助けられてばかりで……！」

このまま一言もしゃべることなく過ごせると思っていたのに——！ 心のなかでは大焦りしながらステラは訴える。ステラはたとえ見知った相手でも自分からしゃべるのが苦手だ。これはまだまだ治せそうにない。

「私も同じですよ、シユウメイギク様。私たち、セイメイ騎士団フレイナイトの花騎士はたとえ相手がコダイバナの害虫だとしても、そう簡単にはやられないよっ」

そんなことを内心で叫びながらしどろもどろになっていると、スターチスが自分の代わりに務めるようにして喋りだした。

「なんだいスターチス、急に自慢気になっちゃって」

「当然のことを言ったただけだよ団長さんっ。私とステラと他のみんな。私たちをイチから育てて戦えるようにしてくれたのは団長さんにほかならないもん。自慢のボスを誇らしく思ったっ
ていいでしょ」

「そう言ってくれるなら嬉しいな。俺だって大切な部下をそうやすやすと死なせたりなんかさせないから」

「臆面もなくそういうキザな子ことを言えるのが団長さんだよ。えへへっ」

「……それって褒めてる？」

「もっちらろんっ」

白い歯を見せながら満面の笑みでそう豪語するスターチスに、団長は恥ずかしそうに目を背けながら応じる。その様子を眺めながらシユウメイギクはクスツと笑みをこぼした。

「叶うならば戦場に殉じた、そなたの兄君にも戦いを見せたかったものよな」

シユウメイギクが一瞬遠い目を見せたあとでそうこぼす。

今ステラたちが所屬している、シユウメイギクは正確には二代目に当たり、一度解散した過去を持つ。本来のメンバーを率いていたのは団長の兄であり、彼を慕い、着いて来た花騎士たちが、かつてこの国を守っていたのだ。

シユウメイギクは古くからベルガモットバレー王家直屬の騎士団の名として各国に知られており、代々ベルガモットバレー王族とゆかりの深い、武家貴族の長男が団長を務めることが決まっていた。それゆえに、本来ならば次男である今の団長が着任することはなかった。

そのしきたりが消えたきつかけは、先代の団長が害虫との戦いで殉死したことだ。

先代団長は王族に親しい武家貴族——通称、防人の血族の長男として生まれ、優れた剣術を身に付けていた事から劍聖と呼ばれていた男だった。その武勇が花騎士を導くのにふさわしいと見初められたのか、彼は世界花の意思に団長として選ばれた。常に由緒正しき戦装束である陣羽織をまとった姿は、近隣諸国の人々にも印象強かったことから、『ミスター・ブシドー』と人呼ばれることもあった。

だが英傑として名をはせていた彼にも散り様は一瞬にして訪れた。不運にもシユウメイギク

が自ら人々の前に現れる祭りの日に、害虫が攻め込んできたのだ。彼は主君であるシユウメイギクを守るため、自ら身代わりとなり犠牲になったのだ。

その後自ら「彼の意思を継ぐ」と言い出したのが、弟である今の団長だ。彼は着任してすぐに自ら騎士学校や他の騎士団に赴いて、不足した花騎士たちを迎え入れるために尽力した。ステラとスターチスもその時にスカウトされたのだ。

そして世界花の意思という、神威に資質を見い出された団長はシユウメイギクより先代の形見であり騎士団長の証でもある、穢れ無き銀の剣を賜り、事実上解散状態となっていた。セイメイ騎士団を再編した。

そして、花騎士たちとともに何度も戦場で戦い続けて着実な戦果を上げ続けた結果、見事騎士団の再興は成し遂げられ、同時に兄の死で没落していた実家を立て直したのだ。

ステラにとって団長とはもう長い付き合いになる。

今では互いに恋人の関係となるほどに。

そして自分たち、セイメイ騎士団はシユウメイギクが最も信頼する懐刀だ。こうして城の誰の存在も挟むことなく、直接女王と顔を合わせて話すことができる自分たちは、それだけで特別な存在であることを意味していた。

「俺は、まだまだ兄さんのようにはなりません。先代の全盛期においては、今の俺たちとは比べ物にならないと聞いています。そこに追いつくためには俺もみんなも、これからです」

握り締めた右手を見つめて言う彼の言葉を聞きながらステラは思う。

生き延びる技術や智慧を花騎士たちに授け、前線では軍師としての務めを果たす——言葉にするのは簡単だが彼の偉業は一筋縄では行かないことだ。

そして深い信頼を少女たちから得るために、自らもまた鉄火場に臆せず向かっていく。その英雄的行動は彼が自ら進言し、望んだことである。

通常花騎士の任務において、常人と変わりない団長が自ら敵地に赴く必要性は薄く、リスクも高い。

しかし彼は自ら前線に立つことで味方の士気を高めさせ、さらには兄と同様に持つ軍師の才を発揮することを常としていた。常在戦場の意志を彼は体現して見せたのだ。

そして今回下された、亡国コダイバナの偵察任務は正直過酷なものだった。数々の戦闘をこなしつつ、敵戦力の調査を行なうのは容易なことではない。

無事にこの国に戻ってこれたのは、団長の存在あるからこそ。彼のおかげで自分たちは仲間を誰ひとり失うこともなく、故郷に帰ることができたのだ。

「『まだまだ』、か。例えばそうだとしても、そなたに感謝の言葉をかける者がいることを忘れてはならぬぞ？ そなたとそなたの花騎士は、まごうことなき英傑。その英傑が自らを卑下し、そなたの働きを認める者の言葉から耳をふさいではならぬ。……なによりここに、幼き頃からそなたの頑張りを見てきた者がいるではないか」

「シユウメイギク様」

彼の声の中に安堵が宿っている。口ではそう言いつつも、女王から褒められるのは彼にとってもうれいのだろうか。

「あっちゃあ。普段頑固な団長さんも、昔から世話になってた憧れのお姉さんからの言葉には素直だねっ」

「うわっ！」

それに対し、すぐさま隣のスターチスがいたずらっぽい顔を浮かべながら、団長の肩に飛びついた。急に左肩から抱きつかれてしまい、張り詰めていた団長の顔が一瞬にして慌てたものとなる。堪らず彼は顔を赤くさせながらスターチスへ振り向いた。

「やめろよスターチス、まだ報告中だぞ」

「気にしな—いのっ、団長さん！ もう任務も終わったんだし、もうすぐ夕方なんだから早く自由にさせてってばっ。疲れてるんだし残業はノーサンキューだよ—っ」

「報告が終わるまでが任務だよ。それに、今回の任務で一番頑張ってくれた君たち抜きでシユウメイギク様に報告するわけにも行かないだろ？」

「だからってこんな肩肘張った空気、いつまでも耐えられない—……ステラちゃんもいつまでもこんな空気が続くの疲れるでしょ？」

そこで急に名前を呼ばれて驚く。まさか自分にお呼びがかかるとは思わなかった。

「ボ、ボクは黙ったままこのまま帰れるなら別に……」

「じゃあシユウメイギク様は？ 正直、『任務終わりましたー』って、報告だけで済むと思うんですけどー。この堅物団長さんの肩の力、どうやったらほぐしたらいいですか？」

「ふむ、確かにそなたの言うとおりよな、スターチス。いつまでもこのような格式ばった時を無駄に続ける必要もあるまい。——ステラ、そなたも団長殿の緊張を取るために抱きついてみてくれぬか？」

「何言ってるんですかシユウメイギク様!？」

シユウメイギクの突然の言葉に、団長は怒涛の焦りを見せる。その言葉に対しステラは一瞬間から火が出そうになったが、スターチスが意味深な眼差しと笑顔をこちらに向けていることに気づく。

目で訴えているのだ。「団長に抱きつけるチャンスだよ！」と。

「ステラも別に聞かなくていいから——って、うわあ！」

——なるようになれ！

ステラはそう思いながら団長の静止を無視しつつ、「えいつ」と声を上げて抱きついた。

自分が団長のことを好きでいるのは親友のスターチスもシユウメイギクも知っている。だからこそその提案なのだろう。団長に密着すると彼は情けない声を上げながら慌てた。

「ふふつ、戦場の勇者も、女の前ではただの一人の男に過ぎぬな。団長殿」

「あははっ。団長さんの弱点の一つが女の子に弱いことだからね。早く休ませてくれなきゃ、もっと抱きついちゃうぞー?」

「わかった、わかったからそろそろ離れてよ。……せっかく今日はみんなにご褒美だつて用意したのに」

「ご褒美!」

ふと団長が口にした言葉に過敏に反応し、ステラとスターチスは団長から飛び退く。

「ホント、団長さん!」

「嘘言うわけ無いでしょスターチス。今日まで頑張ってくれたし、みんなで外食でも行かないかって思ってたんだ。ほら、城の近くに料亭があるだろ? あそこで食事なんてどうかな」

「あの雑誌で特集組まれたためちゃくちゃ高いところ!? やったよステラちゃん、今夜はパーティーだよ!」

そんな言葉を聞いて無視なんかできるはずもなかった。スターチスはステラの両手をしっかりと握りつつ喜ぶ。しかしその言葉には同意しつつも、ステラは団長の提案を素直に喜べなかった。

「えっ……!? あ……うれしい、です」

「ん、どうしたの? ステラちゃん」

「いや……ご褒美がごちそうなのは嬉しいんですけど……あそこ、すっごく人気ですよ。今

から言ったらちようどランチタイムだし、すつごく人多いんじゃないですか？」

ステラは申し訳ない気持ちで団長に言うと、彼はハツとした様子を見せた。任務では緻密な計画を立てる彼にしてはらしくない。

「ごめん。そう言えばステラ、人見知りだったよな」

ステラは知らない人間と話すのが苦手だ。

スターチスの言葉をあえて借りるのなら「超・人見知り」である。日頃からなじみの人間ばかりで毎日を過ごしていることからつい忘れていたのだろう。

「貸し切りにはできなかったの？」

「無理言い過ぎ。任務中にどうやって予約するんだ。俺たちがここに帰ってこれたのついさきだったろ？ さすがに貸し切りとなると何日か前に相談しなきゃいけないし……ごめん、二人に喜んでもらおうと思ってたんだけど、相談するべきだったよ」

「いいんです団長さん、お心遣いだけで。けどお料理、かあ」

沸き立っていた喜びが一瞬にして沈下する。団長もここ毎日の疲れで、ステラ自身のことまで頭が回りきらなかったのだろう。

それでも彼の気持ちは十分に伝わっている。ならここは苦手な場とは分かりきっていても、彼の好意を受け止めるべきではないのか？

ステラは小さい右手に力を込めて、「やっぱりみんなで行きましょう」と言おうとした。そ

の時、

「ふむ、落ち着ける場であればよいのだな、団長殿」

急にシウメイギクがあごに軽く手を当てつつそう言った。全員で彼女の顔を見つめた後に、シウメイギクは続ける。

「なら、そなたの実家なんてまさに適しておろう」

「え、俺の家ですか」

「うむ。そなたの家は広く、今からなら馬車もわらわの声ですぐ出せる。そなたの家にはこの城に仕えていた『じいや』もおるではないか。今は孫二人に後を継がせるため、使用人として育てていることも聞いておる……彼らの料理なら、店で食べるのと変わるまい」

噂で聞いたことがある。どうやら団長の実家では、昔から三人の使用人が働いているらしい。一人はかつてこの王城で『じいや』と呼ばれていた伝説の執事で、侍女コリウスの教育を務めていたとか。

高齢となった今も、団長の家に雇われる形で一生現役を貫き通しているらしい。後の二人は、そのじいやの孫娘と孫息子で、一人前の執事となるべく厳しく育てられた……と。

「そなたにとって、『じいや』は家族も同然。顔を出すついでにステラ、スターチス二人を家に招き、実家で食事としゃれ込むのもよいであろう。時には馴染みの家で羽を休めるのも人としての務め。じいやたち皆みなもそなたの元気な姿を見たいと思うだろうて」

「つまり……それって団長さんの実家で夕ご飯パーティー!? やったよステラちゃん! 外食より嬉しいかも!」

シユウメイギクの提案にスターチスが大喜びしている。いたずら好きで面白そうなことに対して貪欲な彼女としては、団長の家に行くことそのものにワクワクが止まらないのだ。もしかしたら団長の実家に行けることで、新たないたずらの一つでもひらめいたのかもしれない。

「で、でもそれは団長さんに迷惑なんじゃ——」

「はいステラちゃん、すこし黙っていてくれるかな?」

ステラがその提案を遮ろうとした途端、スターチスから一瞬にして口に手を当てられて喋ることができなくなってしまう。ステラは目だけで「何するんですか!」と訴えると、スターチスはすぐさま手を離して耳元でささやいてきた。

(何するんですかスターチスさん!?)

(いやいやいや! ここはシユウメイギク様の提案に乗ろうよステラちゃん)

(どうしてです?)

(だってこんなの滅多にないよ? なんだか面白そうだし、ステラちゃんとしては団長さんの部屋に入れるチャンスじゃない!)

(それはたしかにそうですけど!)

「ふたりとも、聞こえてるよ」

「聞こえるように言ったんだよ団長さんっ。いい顔してるよ？」

「いい気分じゃないよ」

スターチスが茶目っ気に言うのと、彼は軽くため息をはきながら顔に手を当てていた。

「まったく他人事だと思つて……大体俺だつて家を出てからロクに帰っていないんだ。今から向かうつて言つて、じいやたちに気を使わせるわけにも——」

「それなら問題ないぞ、団長殿」

「えっ」

「言つたであろう。そなたたちの活躍は我が遠見とらみの魔法で見守つておつたと。そなたたちが帰つてくる今日に合わせて、すでに出迎えと食事の用意をさせておる。ステラのことは理解しておつたし、どの道こうなるだろうと予測していたのでな」

「わかつてるなら初めからそう言つてください」

団長は心の底から脱力したように肩を落とす。最初から外食の提案は無に帰すと彼女は分かっていたのだろう。伊達だてに子供の頃から団長の成長を見守つてきたわけではないらしい。

「さて、わらわも発つとするか。団長殿」

「は!？」

玉座から腰を上げて発した彼女の言葉に対し、彼は理解が追いついていないようだった。まるで自分も付いて行くと言わんばかりだ。そんな発想は団長の頭の中にはなかったらしく——

